第４学年分科会　　**提案発表**

徳島市上八万小学校　安西　莉子

１　はじめに

本学級の児童は，図画工作の授業を楽しみにし，創作活動に意欲的に取り組むことができる。しかし，自分がつくろうとしているイメージが浮かばない，技術が伴わないなどの理由で苦手意識をもつ児童もいる。また，よりよい表現を求めて自分の表現を追求し，粘り強く活動に取り組むことができないこともある。

そこで，題材に親しむ時間を十分にとり，自分で材料に触れ，選び集めることで製作への意欲を高めたいと考えた。また，これらの活動を通して，森に住む妖精へのイメージを膨らませることにつなげたいとも考えた。製作中にも，友達の作品を鑑賞する場を多く設定し，自分の作品に取り入れたり，つくりかえたりすることで，自分や友達の作品のよさや面白さを味わうことができるのではないかと考え，実践に取り組んだ。

２　指導の実際

（１）　題材　『みんなの森のふしぎなようせい』〈A 表現（２）立体に表す・B 鑑賞〉

①目標　ア　材料を積極的に集め，材料に親しみながら表現活動を楽しむことができる。

イ　「みんなの森」の雰囲気から，そこにいる妖精が，どのような形や色をしているか考えることができる。

ウ　つくりたいものに合わせて材料や用具を選んだり，表し方を工夫したりすることができる。

エ　妖精と場所との関係がよく分かるように写真を撮り，その写真を鑑賞し合うことで，お互いの表現の工夫や，組合せのよさや面白さを感じ取ることができる。

②実践内容

（事前）「みんなの森」を探検し，自然の材料に触れたり，組み合わせたりしながらふしぎな妖精のイメージを広げる。　・・・１時間

第１次　「みんなの森」で材料を集める。　・・・１時間

第２次　見通しをもちながら，自分のイメージに合わせた表現や方法を工夫してふしぎな妖精をつくる。　・・・４時間

第３次　できた作品に合う場所を見つけて写真を撮り，お互いのよさや面白さを伝え合う。　・・・１時間

３　結果と考察

（１）「意欲的に活動に取り組むことができるようにするための手立て」について

事前に「みんなの森」で出会う自然の材料を使って表現することを伝え，「森を探検しよう」と呼びかけ，自由に森の中で遊ぶ時間をとった。普段慣れ親しんでいる地域の中の自然とはいえ，足を踏み入れる機会の少ない「みんなの森」で，児童は目を輝かせながら探検をした。活動途中に，「作品に使う材料を集めたい。」や「これを使ったらうまく表現できそう。」などの発言が自然と聞かれ，その場の材料を使って製作を始める児童もいた。「みんなの森」に親しみ，実際に材料に触れ，自分で使いたい材料を選び集めることが，意欲付けに有効であったと考えられる。しかし，材料の大きさに制限をもうけない方が，より豊かな表現ができた可能性があるという課題も残った。

（２）「材料や道具を工夫して，自分のイメージ通りに表現できるようにするための支援」について

「『みんなの森のふしぎなようせい』は，森に住む妖精で，人間には姿が見えないから，自分の中で形や色を自由にイメージすることができるんだよ」と呼びかけた。また，アイデアスケッチをする際に「みんなの森」の写真や動画を見せた。そこから感じる雰囲気や音などと自分の森での経験を基に，児童はそれぞれに妖精の姿を想像した。これらの支援により，イメージを広げて発想･構想することが苦手な児童も，妖精の姿を自由な発想で考えることができた。

製作を始める際には，材料の接続や接着の材料として，今まで使用経験のある筋金入り紙紐と木工用ボンド，ホットボンドを用意し，木工用ボンドとホットボンドの使い分けや注意点を確認した。筋金入りの紙紐の使い方を事前の題材で理解していたことで，複雑な自然の材料をつないだり固定したりする手段として有効に使用することができていた。製作途中の鑑賞では，筋金を自在に変形させて飾り付けとして使用していた児童の作品に多くの児童が注目し，以後の表現でそのアイデアを取り入れる場面が見られた。製作途中で木材を削ったり，穴を開けたりしたいという希望を述べる児童がいたが，道具の準備ができておらず，表現の幅を狭めてしまったことは課題点である。

「みんなの森」を探検した後にかいたアイデアスケッチでは，４本足で自立する妖精をかいていた児童が多かった。しかし，製作を始めると，４本の枝で自立させることの難しさに悩む児童が見られた。そこで，足の必要性を考え直すなど，材料から妖精の姿形についてイメージを広げることができるように声かけを行った。その結果，様々な姿形で表現する児童が増えた。また，自立させたい児童への手立てとしては，三脚を紹介し，３本の木の組合せでも自立させることができることを伝えた。

（３）「友達のアイデアや工夫に興味をもつことができるようにする場の設定」について

席を班にし，製作中に自然と友達の表現を見ることができるようにしたことで，友達の表現に興味をもち，互いの表現を参考にしやすくなっていた。製作途中で友達の作品を見たり，質問をしたりする時間を設け，その後は再度自分の作品と向き合う時間をとった。そこでは，友達の工夫を取り入れたり，つくりかえたりする姿が見られ，よりよい表現を追求していく喜びが感じられている様子が見られた。また，鑑賞活動は，表現方法を友達同士で教え合う機会にもなった。

第３次の活動では，森の妖精が学校に遊びに来たという物語から，自分のつくった妖精と場所との組合せを考え，写真を撮影するようにした。児童はそれぞれの妖精の性格や気持ちを想像し，イメージに適した場所を見付け，組み合わせる面白さを味わいながら撮影をしていた。鑑賞会では，それぞれの妖精の特徴を生かした写真を楽しく鑑賞し，写真の中の妖精の気持ちや言葉を付箋に記し，写真に貼る活動を行った。友達が，自分のつくった妖精の気持ちに思いをめぐらせ，様々な意見が記されたのを見て，感じ方の違いを楽しむことができていた。

４　おわりに

本題材では，児童が「みんなの森」に親しむ時間を十分にとったことが，積極的に材料にかかわり，意欲的に活動することにつながった。製作中はイメージを実現するための具体的な方法を提示することで，児童は自分の思い描くイメージに近づけようと，夢中で活動に取り組むことができていた。鑑賞活動では，作品そのものの鑑賞だけでなく，作品と場所を組合せて写真を撮る活動を取り入れたことで，それぞれの感じ方の違いを楽しむことができた。本単元以前は自分の表現に自信がもてず，作品に愛着をもてなかった児童も，場所との組合せとして表現した作品(写真)では，イメージ通りの表現ができたと笑顔を見せていた。今まで，自分の作品とだけ向き合い製作を進めることの多かった児童にとって，友達の作品を見て工夫を取り入れることや，自分の作品を友達に見てもらう，評価してもらう鑑賞の場の設定は，自己肯定感の向上に効果が見られ，製作意欲の向上や自分の表現に自信をもたせる支援となることがわかった。今後も，児童相互のかかわり合いに着目した支援のあり方を，実践を通して探求していきたいと考えている。